

自然観と生命表現の変容：事例分析(2)アート・キャンプ2013

著者	磯部 錦司, 山崎 真里
雑誌名	教育学部紀要
巻	7
ページ	31-44
発行年	2014
URL	http://id.nii.ac.jp/1454/00001889/

原著 (Article)

自然観と生命表現の変容

——事例分析 2 (アート・キャンプ 2013) ——

**The Transformation of a View of Nature and
a Life Expression
– A Case Study 2 (Art Camp 2013) –**

磯部 錦司^{*}
ISOBE, Kinji^{*}

山崎 真里^{*}
YAMAZAKI, Mari^{*}

要 旨

本研究は、「造形芸術という経験」の質によって「生命のイメージ」とその表現はどのように変化し、自然観が構築されるのかを、事前・事後の作品の表現内容の比較分析において示そうとするものである。直接的経験の質が深まるほど、そのイメージは、「生命への感じ方」の広がりや、環境との「状況や関係性」で表されたことをアートキャンプの事例から考察する。

This research shows how an image of life and its expression change and how a view of nature is created according to quality of experience through Art, by comparing the work before the fact and the work after the fact. We examine a case of experience through “Art Camp 2013” and consider the fact that as quality of a direct experience deepened, its image was indicated by “expanse of the way of feeling to life” and “conditions and relations” between the environment and life.

キーワード：芸術，美術教育，自然観，生命

Key words：Art, Art education, View of nature, Life

1. はじめに

本研究は、「経験の質的な深まりにおいて変容する自然観・生命観とその表現内容」を、テーマにした一連の研究である。事例分析(1)⁽¹⁾では、保育者・教員養成大学における授業科目「生活科」，「保育指導法（環境）」の栽培体験の事前事後による調査から、直接に生命と関わる過程をとおして検討した。今回は、「自然と直接に関わる造形活動」をとおし、先行研究で行った拙著「自然観とく生命＞表現の変容—外界との関係を問う絵画表現の実践から—」⁽²⁾において示した内容を具体的な事例において実証していく。事前と事後に「生命のイメージ」を絵画で表現した内容から分析し、自然観・生命観の変容をもたらし経験について質的考察を行い、造形活動をとおした経験によって変容する自然観について述べていく。

2. 研究の方法

2-1. 対象事例：利賀村アートキャンプ

富山県南砺市利賀村で行う2泊3日の演習である。自然環境の中で、造形活動及び子どもや村の人々との関わりをとおして生活する。保育園と小学校では、子どもたちとワークショップを計画し行う。また、森、川、星など豊かな自然環境と直接に関わる中で、自然と自分との関わりを感じながら造形活動を繰り返し広げる。さらに、村の人々との関わり、村での食生活等、村での生活全体をとおして、生命や自然との関係を感じていく。2013年度は、梶山女学園大学教育学部3～4年生25名が参加し、その内、事前事後の両調査に参加できた学生23名を対象者とした。活動は2013年8月18日～20日に行った。

2-2. 自然環境とつくる活動

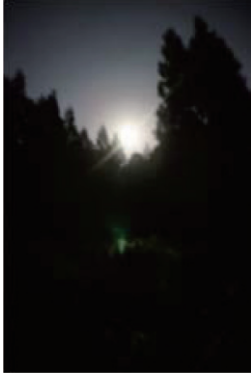
ワーク1 「森とつながろう」: 森の中で、環境と関わりながら紙テープを用い、イメージを広げていく。



ワーク2 「河原とつくろう」: 河原において自然との関係を感じながら、環境と一体化した作品を制作する。

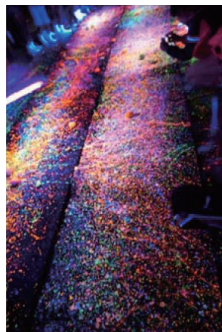


ワーク3 「夜空と炎のワークショップ」: 闇夜の森の中をナイトウォークし、音や闇を鑑賞し一人になって星空を鑑賞する。そこで感じたことや考えたことを、薪でつくったオブジェを燃やし、消えて無くなる燐と夜空と闇を鑑賞しながら言語で共有しよう。



2-3. 村の子どもたちとつくる活動

ワーク4 「星空をつくろう (利賀小学校)」: 体育館に昨年度のワークショップで黒ロール画用紙に蛍光絵具で子どもたちとつくった星空を敷き詰め、石に蛍光絵具で自分の星を描き、星空に置き、ブラックライトで照らしてできる作品を鑑賞する。



ワーク5 「お花畑をつくろう (平みどり保育園)」: 2歳児から5歳児の子どもたちと一緒に、指絵具を用いロールの画用紙にフィンガーペイントで花畑を描いていく。



ワーク6 「シャボン玉をつくろう」(利賀村ささゆり保育園)：シャボン玉を用いてロール画用紙にシャボン玉を描き，シャボン玉の中に入り，様々な形のシャボン玉をつくって飛ばし遊ぶ。



2-4. その他

村での生活体験：村の人たちの生活と文化に触れ，生活を共にする。活動ごとに学生相互で討議や感想を述べ合い，感じ方や見方の広がりや深まりを共有していく。



2-5. 調査方法

本研究の効果の検証方法は，事前事後の絵画作品の比較から行った。具体的には，上に記した活動の事前事後に「生命のイメージ」を主題に絵で表現することである。学生には，「生命，自然のイメージや，そこから感じとることを描いてください」と発問した。時間は制限をせずに，個人に任せた。事前事後それぞれ絵を描いた後に，表した内容について言葉で記述してもらった。絵画はハガキ大の和紙に16色のクレヨンで表現してもらい，事前23枚，事後23枚を収集した。

2-6. 分析方法

(1)作品の造形要素からの比較：描かれている作品の「形・色・塗り方」について分類

し、その集計内容から事前事後の特徴について考察する。形の分類は、描かれている輪郭線と形、記述された内容を基に、「具体的な事物が描かれている形」を具象とし、「図形や形が具体的な事物として表されていない面」、「直線や曲線などの有機的な線」、「スクリブルで描かれているもの」を抽象とした。具象のみ、抽象のみ、その混在したものに内容は分けられる。色の分類は、マンセル分類法による色相環を基に、それに対応した市販（サクラクレパス社、16色）の調査で使用した描画材の色名を用いた。三原色を中心とした赤系、青系、黄色系と、使用頻度の高い茶色系、緑系、無彩色において分類した。色の属性（色相、明度、彩度）による分類は行っていない。

- (2)表現内容の記述から：記述された内容を、先行研究^{(1),(2)}において示されている視点をもとに、作品の表現内容と照らし合わせ分析する。
- (3)事例作品による質的分析：事前と事後に変化の見られる作品を事例として取り上げ、特に、「状況や関係性」へとイメージが変化した事例について考察を行う。

3. 作品の比較分析と考察

3-1. 造形要素からの比較

(1)形

形の分析結果は図1、2に示した。事前と事後の顕著な変容として、具象のみを表した作品が7枚と減っている。アートキャンプの経験の中で生命、自然の温かさ、人とのつながりや自然と人とのつながりの大切さ等、心に響く様々なことを感じる学生が多くみられた。そのような経験から、生命を事物として捉えるのではなく、「生命

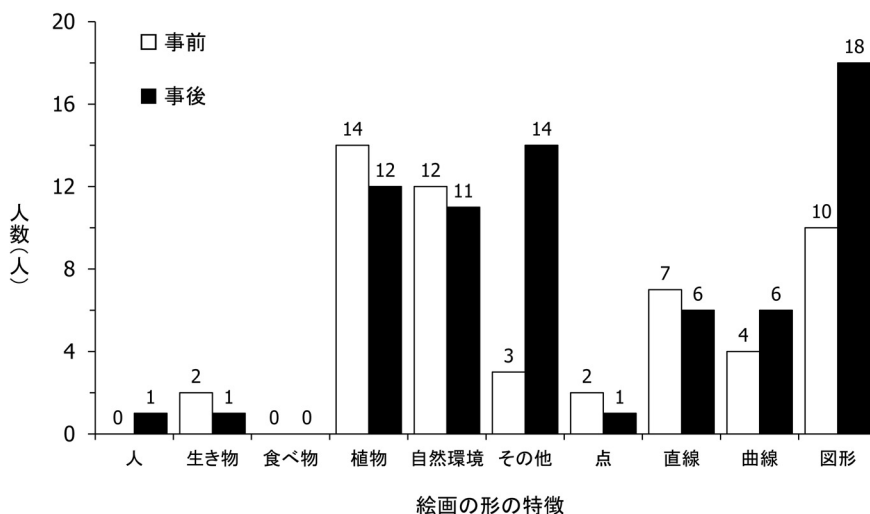


図1. アートキャンプ事前事後における絵画作品の形の比較

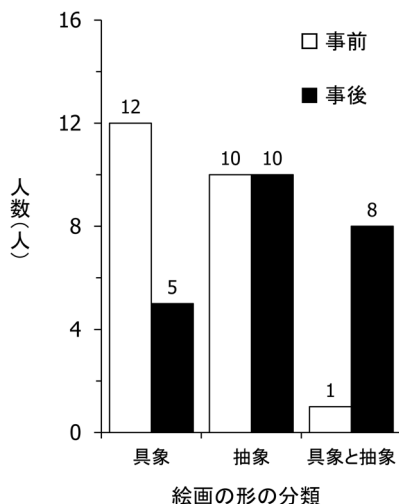


図2. アートキャンプ事前事後における絵画作品の形の分類の比較

のつながり」等の関係性を抽象的に表す作品が事前では5作品、事後では12作品と多くなっている。抽象的なものの中でも、丸を描いている作品が多い。丸によって、「温かさ」、「つながり」、「交わり」、「連続」、「包括」等を表している作品が、事後では23作品中15枚（65.2%）と目立っている。また、事前、事後の両者とも植物や自然環境を描いている作品が多いが、事前事後では描いている内容が異なる。事前の作品では、見たままの周りの山などの風景を視覚的に描いている作品が23作品中9枚ある。事後の作品の中にも、モチーフは植物や自然環境を用いて描いているものが見られるが、「生命のつながり」を表現していたり、経験した中での生命への感じ方を表現したりと、表現内容に大きな違いが見られた。生命を感じる直接的な経験することにより、生命の感じ方が深まり、その内容が作品にも表れている。

(2) 塗り方と色

塗り方は、事前事後で顕著な変容は見られなかった（図3）。また、色については、事前及び事後の両者とも、植物の色に使われる黄緑・緑、空や水の色に使われる水色・青、太陽の色に使われる赤、だいだい、黄色が多いことが分かる（図4）。事前と事後の変化として、桃色と黄色が事前に比べて両者とも8作品増えている。桃色が増えている理由の一つは、事後で、命の温かさや大切さを表す作品が増えていることが関係していることが考えられる。温かさが桃色・赤・だいだい・黄色等の暖色で表現されている。また、黄色が顕著に増えていることは、夜の森のワークショップの中で月や星を鑑賞したことが大きく関係しているであろう。生命のイメージに、月を用いた作品が23枚中11枚ある。森の中で星や月と向き合うという貴重な体験により、学生が月に様々な想いを描いたことが予想される。

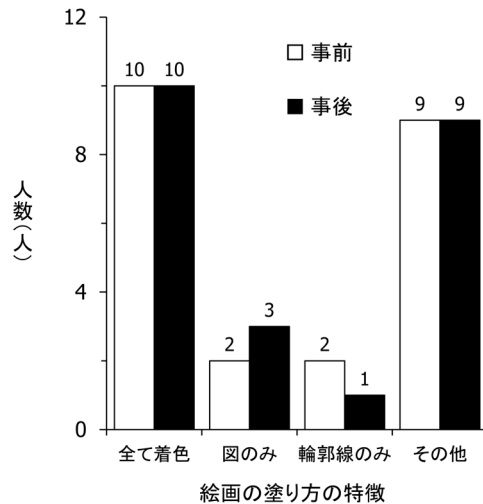


図 3. アートキャンプ事前事後における絵画作品の塗り方の比較

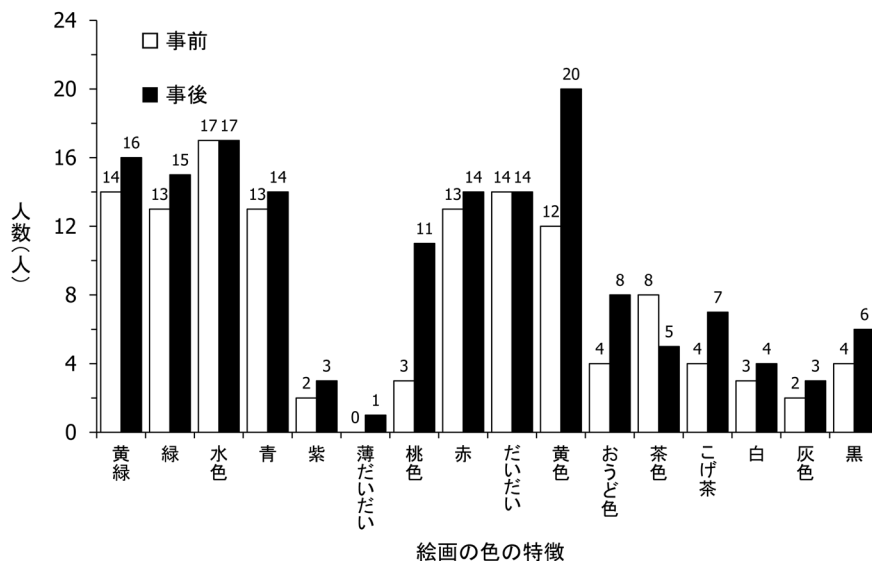


図 4. アートキャンプ事前事後における絵画作品の色の比較

3-2. 絵画を説明する記述内容からの比較

記述の内容は、おおよそ、先行研究⁽¹⁾で示された「命や自然そのものを具体的な事物で表そうとしている」、「自然、命に対する気持ちや感じるものを表そうとしている」、「状況、状態、関係性（交わり、広がり等）を表そうとしている」の3つに分類できる。先行研究の栽培体験⁽¹⁾で見られた「生命へのエネルギーを表そうとしている」の内容は本事例では見られなかった。主な具体的な記述（抜粋）は以下である。

●「命や自然そのものを具体的な事物で表そうとしている」

- ・自然の中には、色々な色があり、山、川、田畑等同じ色で描いてしまいがちなものでも、それぞれ違う色を持っていることを鳥の鳴き声や風の心地良さ等、五感で感じ取ることで気づいた
- ・夜空に輝く月、木やきれいな川等利賀村で体験したもの
- ・川の青、森の緑、食べたトマトの赤、魚の青、月の黄色、すべての生命を感じた
- 「自然、命に対する気持ちや感じるものを表そうとしている」
- ・緑ばかりのイメージだったが、利賀村の体験から、温かみや暖かさを感じ取り、温かい色のイメージ
- ・命は温かいイメージであり、おいしいご飯や優しい民宿の方、見てみることの出来ない空気、空の温かさ等、様々な温かさがあることを実感
- ・人の温かさが一番の生命を感じる
- ・民宿の方の温かさと優しさ、子どもたちの明るい笑顔
- ・キラキラしている
- ・自然の命がとても温かく、優しいのでふわふわ、ほわほわな感じ
- 「状況、状態、関係性（交わり、広がり等）を表そうとしている」
- ・森が自分を包んでくれ、寂しいけど、落ち着く
- ・自分らしさや理想の自分を持ちたくて、芯をイメージしてまず黄色の丸をかき、その黄色の丸は、この利賀村で見た月と重ね合わせた
- ・命は自分では気づかないところにあり、ゆっくり流れたり、あっという間に走って行ったり、それを静かに見ている森や川、空があり、自分はどこにいるのか
- ・すべてバラバラのものの人、太陽、川、星、森すべてひとつにまとまった、一つの命、つながっている感じ
- ・様々な命があるが、すべてのものにつながりがある
- ・世界、地球の中で人が皆つながって、関わって生きている
- ・思い浮かんだたくさんの人の命、それぞれあるが、みんなつながっている
- ・空も山も音も光もすべて合わさって自然の偉大さに感動した
- ・愛と木と土のつながりが一人ひとりの身体とつながっているイメージ

3-3. 考察

事前の作品では、視覚的なものを捉えて風景や自然物を表したものは23作品中14枚(60.8%)あり、その中でも見たままの山々の風景のみを描いた作品が9枚である。大自然に囲まれながら描いたことから、自然＝生命と捉えている学生が多いと推測する。事後では、生命のイメージを視覚的な風景や事物で表現した内容の作品は3作品(13.0%)に減少した。自然界にたくさんの生命があることを事物で表す作品や、「生命の大切さや温かさ」を抽象的に表す作品が事前の作品では目立っている。また、生命に対する気持ちや感じるものを表している作品が、事前では4作品(17.3%)、事後では8作品(34.4%)ある。生命のイメージを「状況や関係性」で表した作品は、

事前では5作品(21.7%)であったが、事後では12作品(52.1%)に増加し、事前と事後で7名(30.4%)の作品に変化が見られた。

事後の作品では、「自然、命に気持ちや感じるものを表そうとしている」ものと「状況、状態、関係性(交わり、広がり等)を表そうとしている」ものが、合わせて20枚(70%)と多い。「自然、命に気持ちや感じるものを表そうとしている」の事例では、「村の人々の関わりから人の温かさ、温もりを感じる」、「森で寝転がりながら月を見て、自分自身と向き合ったことで、森や月に温かさを感じる」、「自然とたくさん触れ合うことで自然の温かさを感じる」等、様々な体験から、生命というものに温かさを感じている。また、「状況、状態、関係性(交わり、広がり等)を表そうとしている」ものでは、人も自然も、すべての命に「つながりを感じる」という作品が多い。アートキャンプを通して、生命に触れ、その生命を感じることで、一つ一つの命をつながりとして感じ、そしてすべてが一つの生命であると感じている内容が記述から確認できる。また、自然物をモチーフとして用いた作品は事後でも多いが、ただ風景を描いただけではなく、自然や生命に込めるそれぞれの想いも重ねて描いているという内容に違いが見られた。

4. 事例作品の内容分析と考察

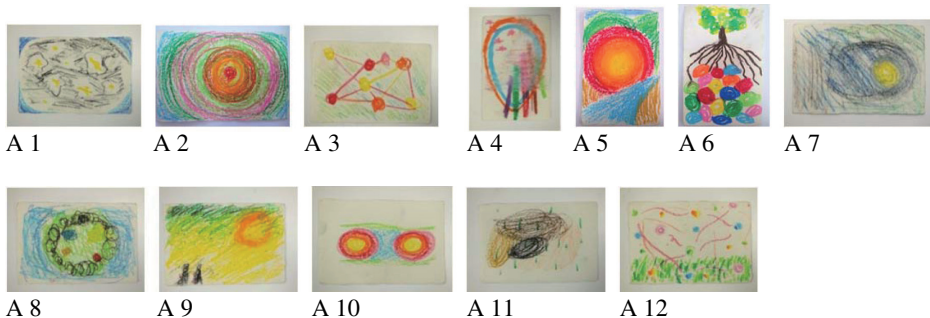
4-1. 事後の表現内容

事後の作品について、作品の内容と記述から「生命のイメージ」の内容について考察する。先に分析した作品と本論3-2で先行研究をもとに分類した記述の内容から、表現内容は下記のA, B, Cの群に凡そ分類できる。しかし、多くの作品でその内容は重なり合っている。

生命のイメージを、「状況や関係性」(A)で表した作品は、事前では5枚であったが、事後では12枚に増加している。また、「生命そのものに対する感じ方や気持ち」(B)を表している作品も4枚増えている。「自然の事物や風景」(C)で表した作品は、事後では11枚減り3枚となった。

【生命のイメージ(事後)】

A「状況、関係性」(つながり、包括性、全体性、統合性、交わり、連続性)



B「生命に対する気持ちや感じたこと」（温かさ、柔らかさ、優しさ、清らかさ、輝き）



B 1

B 2

B 3

B 4

B 5

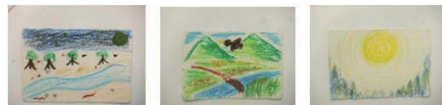
B 6



B 7

B 8

C「自然の事物や風景」



C 1

C 2

C 3

事後に見られる表現内容は、A 群では、生命のイメージを「つながり」や「交わり」、「連続性」などの状態で捉えたもの、「一体感」や「全体的」、「包括的」など外界との関係性において表そうとする作品が多くなっている。また、B 群では、「温かさ」や「優しさ」、「柔らかさ」などの状態でイメージを表そうとする作品が増えている。C 群の生命のイメージを自然の風景や事物そのもので捉えようとする作品が減ったことは、「視覚的なイメージ」から「観念的なイメージ」に内容が変容していることが11枚の作品から確認できる。同時に、具象作品が減り抽象作品が増えたこともこの内容と関連していると思われる。

表現内容は、一つの作品の中でも重なっている。

A 11 の作品は、自分と自然の関係を時間の流れや連続性の中で捉え、さらに「自分はどこにあるのか」という状況的、包括的な感じ方を下記のように述べている。この作品は、自分と外界との関係で生命を捉え、環境の中に自分の存在を見つけようとしているところに特徴が見られる。視覚的な感じ方だけでは、連続性や包括的な内容を表現できないことが予測される。

「命は、自分では気づかないところにもあって、ゆっくりと流れたり、あっという間に走っていったり、それを静かに見ている森や川や空があって、『自分はどこにあるんだろう』と思ってこの絵ができました。」(A 11)

さらに、A 4 の作品は、A 群と B 群の内容が重なっている。この作品は、オレンジ色と水色を用い流動感を出すために丸の図式で身体を表している。そして、身体と外

界の関係をつながりで表し、温かさや柔らかさを、白を重ねることによって同時に表現しようとしている。そしてさらに、星を自分たちの存在に見立て、包括的に自分たちと自然の関係を表現しようとしている。

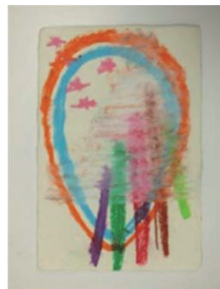
「オレンジと水色は人を表します。あたたかくて、でも水が流れる体を丸くして表した。そして、ここでは愛と木と人のつながりが、一人ひとりの体とつながっているイメージ、そして、柔らかい空気感を白のクレヨンで表した。ピンクの星は、私たちがそこに少し入り込めた証。」(A4)

また、B群の作品の中にもAの内容を含む作品が見られる。B2の作品は、温かさを表現した作品であるが、視覚的な月や星の光、木、水の自然の中に同時に人の温かさを見ようとしている。視覚的な感じ方にもとづく内容でありながら、自然の事物と人間の温かさを包括的に表現しようとしている。

「澄んだ青や自然の中に、月の光や星の光、人の温かさ木の緑、水の色が、少しずつ見える感じがした。全体的に、自然はすごく澄んだ青のイメージで、人の温かさに生命を感じた。」(B2)



A 11



A 4



B 2

4-2. 「状況や関係性」へのイメージの変容

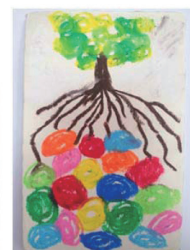
事前から事後において、生命のイメージが「状況や関係性」へと変容した作品事例

<事前> ⇒ <事後>



[A5の変容事例 (C→A)]

<事前> ⇒ <事後>



[A6の変容事例 (C→A)]

について、その表現内容を経験との質的な関係から考察する。「状況や関係性」の内容で表されたA群の作品は、先の事後の分析では、全体で52.1%あり、その内、事前から事後において7名（30.4%）の作品が、C群からA群へ、及び、B群からA群へと変容した。その事例から考察する。

A5の事前の作品は、作品を描いた時に目の前に広がっていた大自然の風景を描いたものである。山々に囲まれ、空気が澄んだ大自然の場所で描いたこの作品は、見たまま、感じたままに視覚的な内容で自然の生命を表している。事後の作品では、山や川、空等の大自然を背景に、真ん中に大きな丸を描いている。作者は、「真ん中の丸は自分らしさや理想の自分を持ちたいという気持ちの芯を表している。そして、その丸を利賀村でみた印象的な月と重ねた。そして、村の人の温かさや子どもたちの笑顔や素直さをイメージして暖色で表現した。そんな自然や人とのつながりの周りには、綺麗な川や山や空等がいつもある。」と述べている。この作品から、力強く描かれた芯の丸は、たくさんの生命のあふれる自然の中で堂々と存在し、様々な想いが込められていることがうかがえる。また、自分の芯の周りに密接に描かれた山や川で、「生命のつながり」を表現しようとしている。大自然に生命を感じていた事前の作品に比べて、事後の作品は、自然との様々な関わり、人との関わりの中から得た「生命の大切さ」が主張されている。アートキャンプの体験をとおして、A5が感じたことが作品に表れている。

A6の事前の作品は、前事例のA5と同様に、大自然に囲まれながら、目の前に広がる自然の風景を見たまま、感じたままに描いたものである。山々に囲まれて、命のイメージを描いた時は、「ただ漠然と大自然というイメージであった。」と作者は述べている。しかし、アートキャンプを終えてからの作品では、「すべてのものにつながりがあり、様々な命があると感じた。」と想いを表現している。作品の下部に描かれたたくさんの丸は、様々な命を表している。また、様々な色の命にも意味があり、目に見える空や山の青や緑の命だけではなく、目に見えない人の温かさや食べ物等、様々な命をカラフルな色で描くことで、それぞれの生命の想いを表現している。

A2の事前の作品は、様々な「生命の温かさ」を表している。一つ一つの命を丸で

<事前> ⇒ <事後>



[A2の変容事例（B→A）]

表し、「生命の大切さ、温かさ」が温かみのある暖色で表現されている。一方、事後の作品でも命を同じ丸で表しているが、彼女の生命に対する想いの変化が表れている。「人、日、川、星、月、空、森、食べ物をすべて一つにまとめました。三日間過ごして、バラバラに体験したものだが“ひとつ”に感じた。」と気持ちを述べている。事前の作品では、個々の命を丸でしっかりと表現していたが、事後の作品では、すべての命をまとめて丸で表現している。また、一つの丸の中に、空や山の青や緑、人の温かみの赤や橙等、様々な色を使って、それぞれの命を表そうとしている。それぞれの体験で感じた生命が、一体化され表現されている。

4-3. 考察

先行研究の事例1（栽培体験）の授業と、本研究のアートキャンプで共通点がいくつか見られた。一つ目の共通点は、事前の作品は、見たままの風景や自然物、生き物を描いている作品が多いが、事後の作品は見たままの植物や風景等の作品が減少しているところである。事後の作品では、風景など視覚から感じたことをありのままに描いていたとしても、様々な生命への気持ちが込められ、その気持ちが作品に表現されている。また、経験を通して、「生命のつながり」や「生命の大切さ、温かさ」などの気持ちが色にも表れている。二つ目の共通点は、事後の作品の方が、抽象的に生命を表す作品が多く見られた。この変容は、特にアートキャンプで顕著に見られる。点、曲線、図形などを描いて、生命の「状態」、「状況」や「関係性」を表す作品が事後で増えている。「つながり、一体感、全体、包括、連続、交わり」などを事物ではなく、抽象的なもので表す作品が増えていることが本事例の傾向として見られた。これらは、経験によって、生命についての感じ方に変化や深まりが生まれたことによって、事物のみを用いた具象ではその内容を表しきれなくなったということが予測される。さらに、視覚的な感じ方による表現内容が事後では極端に少なくなっている。内容が、視覚的なイメージから、生命に対する気持ち、生命の状態、状況や関係性という「観念的なイメージ」へと変容したことが確認できる。

5. 終わりに

これまで述べてきたように、経験をとおして生命に対する感じ方は変容し、その内容が作品に表されていた。本事例の経験内容は、造形活動を軸とした内容であった。先行研究⁽¹⁾で扱った栽培体験と共通する経験の質的内容は、自然環境に直接的に関わる経験であったというところである。さらに、本事例では、芸術活動というモノとの関わりに生まれる想像的な作用や統合的な作用が伴うところに特徴がある。「つながり」や「状況」「関係性」でイメージを捉えようとする内容への変化は、本研究においてより多く確認できた。自然環境と直接的に関わる造形活動において、生命への感じ方や見方は変容し、自然観を培う作用として造形活動が機能していたと言えるだ

ろう。特に、その活動のプロセスや経験内容の質に重要な意味がある。その内容については、別課題として今後の研究において示したい。

■注

- (1)山崎真里・磯部錦司：「自然観と生命表現の変容—事例1（栽培体験）—」．椋山女学園大学教育学部紀要，Vol. 7，pp. 19～30，2014年．
- (2)磯部錦司：「自然観と＜生命＞表現の変容—外界との関係を問う絵画表現の実践から—」．大学美術教育学会誌，第33号，pp. 53～60，大学美術教育学会，2001年．大学生，中学生，小学生，幼児を対象に，造形活動の中で見られる自然観，生命観の変容を，表現内容とその過程から考察した．自然環境の中で「外界とのコミュニケーション」を課題に体験を試み，その体験の事前と事後に，「生命のイメージ」を表現し，その比較から個人内に見られる外界に対する感じ方の変化を検討した．その特徴を，「一体化を成す行為において表れるイメージ」「諸感覚の統合において総体化するイメージ」「抽象的表現において表れる総体としてのイメージ」から述べた．